

人民解放軍五六二〇部隊永豊招待所

人民解放軍五六二〇部隊永豊招待所のツインルームに僕はいる。六月一日（火）午後一〇時過ぎ。夜のしじまを突き破るようにして兵舎の方から流れていた音楽もとだえて、今はとつぷりとした闇の中だ。

お茶を飲みながら、春城を一服。

四川省成都。三国時代（三世紀）に蜀漢が都と定めて以来の古都の夜に僕はいる。人民解放軍五六二〇部隊永豊招待所。不思議な気分だ。

部屋の片隅ではテレビがひとりごとのような呟きを続けている。どこか他人ごとのようによそよそしく感じられる小さな映像と呟きを置き去りにして、いつものように僕は下着を洗濯する。洗面台と便器だけしかないシャワー室。そこに素裸になって僕は僕を洗濯する。言葉もなく。そこに身体を伝うお湯の流れと、しぐさだけ。

昆明―成都。わずかな時間の滞在だったけれども少しずつなじんできた昆明から、約二三時間の列車の旅を経てたどり着いたここ成都、人民解放軍五六二〇部隊永豊招待所の部屋にいて、僕はまだ現実というものにうまく着地できないような気分だ。うまくは言えないけれども、あらゆる存在が客観的なのだ。どこかよそよそしく、また僕という存在とは関係なくそれ自体として完結して存在しているともいった感じなのだ。

言葉なく、僕は下着と僕自身とを洗濯する。それはこの現実との剥離とでもいった感覚を耐えているということではなく、おそらく待っているのだ。現実と僕自身との接続というのは意識的なことがらではなくむしろ身体的なことがらなので、僕は僕自身のしぐさを続けながらただ待つことができるだけなのだ。

シャワー室を出て、僕はツインベッドのひとつに腰を下ろす。ひとりごとのように感じられるテレビの映像と呟きをかたわらにして、山城啤酒（重慶産）を飲みながら春城煙草を吸う。大学ノートに出来を記す。

*

昨夜、九時頃に昆明駅の候車室に入っていくと、相変わらずの行列だった。せっかく親しくなった宮本君や香港人の若者と別れた直後だったので少ししんみりした気分だったけれども、それを振り払うようにして気合を入れて改札の混雑に突入した。

車両服務員にチケットを示して、ようやく車両に乗り込んだ。座席番号は八〇号。窓際の席だ。二三時間近くも座っていないなければならないのかからせめて窓際をと思って手に入れたチケットだった。八〇番、八〇番……と

考えながら座席番号をたどっていくと、八〇番の座席には女性が腰を下ろして、テーブルにうつぶせていた。毎度のことなので、チケットを示しながら、

「ここは僕の席だ」

と告げると、連れらしい若い男が何事かを答えた。意味がよく分からないので首をひねっていると、向かいの座席の男が補足するように何事かを告げた。どうやら女性の具合が悪いので座席を代わってほしいということらしかった。

「ああ、いいですよ」

と軽く答えて通路側に腰を下ろしたのだけれども、夜行の硬座のしんどさは経験済みだったのでちよつとがっかりしたのだった。向かい座席の男は、

「あんたはいい人だ」

と声をかけるのだったけれども。

列車が発券したのは午後九時二五分。しばらくぼんやりしたあと何もすることがないので僕は眠りにかかる。腕組みをしたり、肘掛にもたれるようにしたりして、行儀良く。

幾度も眠り、幾度も目覚めた。どんよりとした眠気が意識におおいかぶさってくるのだけれども、熟睡することはできなくて、次第に行儀も崩れてくるのだった。

なかなか熟睡することができなかったけれども、朝方に列車はどこかの駅に到着し、かなりの乗客が降車した。三人掛けの向かい座席が空席になり、二人連れの方がそちらに移ったので、こちらには三人掛けの座席に僕ひとりということになった。「ラッキー」とばかりに座席を占領して横になったのだった。

しばらく眠り、目覚めると相変わらずの車中風景だった。ただ少しばかり疲労と脂と体臭の密度が増したかのように感じられた。

列車は外界に出たかと思うとトンネルに突入する。その度に明かりは黄色い車内灯だけになり、まるで夜が途切れ途切れに延長しているかのようだ。それもそのはずこの成昆鉄道は雲貴高原の急峻な山岳地帯を抜けるもので、全長一〇〇キロのうち約四〇パーセントをトンネルと鉄橋が占めるというものなのだ。完成は一九七〇年だけれども、国を開きしていたこともあって、当時はその存在が疑問視され、幻の鉄道とさえ呼ばれたのだった。

昼前に、朝昼兼用の食事として車内販売の弁当（二元）とゆで卵（二個一元）を食べた。峨眉山のミネラルウォーター（三元）を飲みながら。もちろん車中にはミネラルウォーターなどを飲んでいる人はほとんどいな

くて、すでにこの報告で紹介したようにビン詰め容器にお茶を入れて飲んでいる。沿海地方に比べると貧しさを感じさせる車内風景だった。

向かいの座席では夫婦らしい若いカップルが仲良く寄り添って、ひそひそと言葉を交わしあっている。一見して漢民族とは異なる顔立ちをしたカップル。おそらくは二〇才台なかばだと思われるのだけれども、彼女との顔は農夫のように風土にさらされたような感じで、刻み込まれた皺は四、五〇才台のようにも思わせる。僕は少し複雑な感情を抱きながら彼と彼女を見ていた。彼女のかたわらには、今時の日本では小学生の子供でも持たないだろうと思われるような、ビニール製の赤いバッグ。まるでキヤラメルの景品のような。若い女性らしいしぐさと、深く刻まれた皺、そして体臭。彼と彼女はどこから来て、そして成都のどこへ何をしに行くのだろうか。

窓の外には荒涼とした山岳地帯の風景が続いていた。土くれだけの丘。見渡す限りの黄色い山並と大地。時おり目につくのは黄色い風景の一角に貼り付いたような緑。水田だ。黄色い土くれだけの風景の一角に震えながら貼り付いているような緑を目にして、その美しさに思わず僕は感動する。こんなに荒涼とした風景のただ中においてさえ人々の営みは行われ、こんなに美しい緑を生みだしているのだと。しかしこの荒涼を生み出したのもまた人々の営みなのだ。中国には処女地はない。樹木を剥ぎ取られた黄色い風景もまた数千年にわたる文明の負荷が排泄した負の遺産なのだ。自然の荒涼と闘う人間の営みという牧歌的な図式はここでは通用しない。

そろそろ成都が近くなり、宿などの情報を仕入れようと思ってガイドブックを眺めていると、鉄道公安官のような制服に身を包んだ男たちが車両に来て、端から座席を点検し始めた。何をしているのかは分からないが、座席をずらして背もたれとの間やシートカバーの中などに手をつ突っ込んだりして、何かを捜しているようだった。何度か車両を行ったり来たりして、やがて目的のモノを捜し出したようだった。見ているとカートの煙草だった。麻葉か銃でも出てくるのかとわくわくしながら見ていたのだけれども、ちよつと拍子抜けだった。煙草はよくもまあこんなところにといいほどたくさん出てきたのだけれども、密輸ということでもないし、どういうことなのか分からなくて、ちよつと欲求不満な一幕だった。

やがて列車は夜八時頃に成都に到着した。人々の脂と体臭、それに煙草のしみついたような硬座車から解放されて、夕暮れの成都火車北駅の駅前広場で深呼吸。長旅に疲れた体をほぐしながら、さっそく買い込んだ成都地図を眺めていた。

(これまで触れる機会がなかったのだけれども、中国では全土が北京時間に統一されている。従って、沿海地方では時間の感覚はほぼ日本と同じだけれども、西の方へ行くにつれて日没は少しずつ遅くなってくる。)

成都の列車駅は北站と南站があり、どちらも成都の中心地からはかなり離れた北はずれ、南はずれにある。ガイドブックに紹介されている安ホテルは市街地の南にかたまっていた。僕が今いるのは北站。かなりの距離があった。おまけにもちろん大都市なのでバス路線は入り組み、ちよつと地図を眺めただけではどのバスに乗ればいいのか分からない。暗くなってきたし、早くホテルを決めたいと焦る気持ちはあったのだけれども、まずは煙草を一服。

重たい鞆を下ろして、駅前広場の雑踏を眺めながら煙草を吸っている、何事か若い女性が声をかけてきた。一瞬とまどったのだけれども、女性は部屋の写真や設備を紹介する簡単なパンフレットのようなものを示したので、すぐに宿の客引きなのだとということが分かった。人民解放軍招待所。僕は少しドキリとし、どんな所なのだろうかと興味を引かれた。衡陽では普通の宿に泊まることのできたので、ものはためしと思つて答えた。

「我是日本人。可以吗？」

「大丈夫、大丈夫」というように女性は駅前広場の一角にテーブルを出して受付をしていた男性のところへ僕をつれていった。男性は、日本人だからと思つたのかもしれないが、資料を見せながら高い三五元のツインルームを勧めるのだった。長旅でシャワーも浴びたかったので、シャワーがあることを確認してその部屋に泊まることにした。地図を見せながら場所を尋ねたが、駅の近くということだけで正確には分からない。

受付の横でしばらく待っていると、僕と同じような客が集まってきた。グループ旅行のような若ものたちや家族連れ。そろつたところで皆はバンの招待所へと送られていった。

人民解放軍招待所は火車北駅の裏側、北側にあった。駅の裏側といっても中国の駅は候車室も出口も片側にしかないもので、跨線橋のある道路をぐるっとひとまわりしなければならぬ。クルマで一〇分ほど。駅の裏側はすではずれという印象で暮れ落ちた街はなにかがらんとした感じだった。

バンは人民解放軍の門前に停車し、僕たちは案内されて衛兵の前を通り、兵舎の脇道を通り、やがて敷地の一角に建てられた招待所に着いた。人民解放軍五六二〇部隊永豊招待所。もちろん決して豪華なホテルではないが三階建てほどの立派な建物だ。

部屋に案内されて洗面所を見たときに、バスタブがないので約束が違

うと思ったのだけでも、よく調べてみるとシャワーのホースと蛇口はあった。洗面所でそのままシャワーを浴びればいいのだということだった。決して、約束違反ではない。

招待所の部屋でしばらく休憩したあと、腹が減ってきたので、遅い夕食をとるために部屋を出た。暗い兵舎の脇道を通り、衛兵の前を通ってバス停へ。なにかがらんとして暗い通りを時おりトラックが通り過ぎた。バス停には何もなく、街灯の黄色い明かりだけ。不安になりつつもしばらく歩いていくと、暗い歩道に一軒の雑貨屋と食堂が明かりを投げかけていた。

食堂に先客は男がひとりだけ。丸テーブルに腰を下ろして、メニューを見ながら青淑肉絲と米飯と鶏蛋湯、それにココナツジュースを注文した。久しぶりの飯らしい飯を食べながら成都の地図を眺めていた。ふと地図の片隅に『成都到達各地航班』という表が記されているのを発見した。成都発の飛行機のタイムテーブルなのだ。タイムテーブルといっても、便数は少ないので、出発曜日が示されているものだ。それによると成都発、拉萨（ラサ）行きの便は『每天』、一日に一便。大都市以外は週に二、三便なので、僕は急に元気になったのだった。可能性が大きくなった。拉萨行きが週に一便とかで日程がうまく合わなければそれだけで拉萨行きはアウトだったからだ。ひとつハードルを越えたような気分で、僕はがつつと運ばれてきた飯を食べた。

満腹になって歩道に出ると、隣の家に人だかりがしていた。二、三〇人の人が歩道にまで椅子を並べて、わいわいとやっている。何だろうと思つて家の方の目にやると、テレビだった。隣近所の人たちなのだろうか、一台のテレビを前にして賑やかに騒いでいる。まるで一九六〇年代前半の日本にタイムスリップしたかのような、何かなつかしい光景に出会ったかのような気がして、僕はふと足を止めた。

*

「ポタラに至らなくても」という一節が、ふとまたベッドに横たわった僕の頭の中を過ぎる。

あれは衡陽あたりのことだったのだろうか。寄り道を繰り返して、漠然と考えていた旅の日程よりもずいぶん遅れてしまつて、最初に東北部（旧満州）をあきらめ、次にシルクロード、そしてできることなら足を踏み入れたかったチベットも無理ではないかと思われたとき、ふと心を過ぎった言葉だった。また日程的なことだけではなくて、果たしてチベットが外国人に対して開放されているのかどうかという情報も僕は持つてはいな

かったのだ。

「ポタラに至らなくても…」と僕はまた思う。ポタラとは言うまでもないラサ（拉薩）のポタラ宮のことだ。それはサンスクリット語で聖地を意味する言葉。歴代ダライ・ラマの宮殿であり、チベットの象徴でもある。

「…私に至る」という当然のことにしようにして思いついた接続を僕は注意深く迂回する。それを言っではおしまいだ、という気がするからだ。おしまいという言葉はやはりおしまいを取っておくのがいいだろう。

そして僕は「ポタラに至らなくても…」という結語のない言葉を心のどこか片隅でもてあそぶ。結語のない宙ぶらりんの言葉。不確定であるということ。言葉に対する不確定なスタンス。僕にはなぜかそのことが大切なことのように思われるのだ。

浮遊する不確定な言葉がある加速を受けたのは、ごく最近、昆明の昆湖飯店でのことだ。同宿の香港人からの情報。今現在はチベットは開放されているということ。そしてラサにおける安宿、ヤクホテルのこと（僕の手っているガイドブックにはチベットの情報は少なく、ほとんど役に立たないものだった）。

「ポタラに至らなくても…」という浮遊する言葉ごと僕は加速を受けて運ばれていく。しかし実際にラサにまで足を伸ばすということは簡単なことではないように思われる。飛行機は『每天』飛んでいるようだけれども、果たして近日のチケットを手に入れられるかどうか。もし行けたとしても、帰りは？ ラサから陸路で青海省のゴルムド（格爾木）を経て敦煌まで抜けるとして、果たしてそのような経路をとることが可能なのだろうか。

僕には今すぐに判断を下すための情報はなかった。だがあらかじめの情報が不足していることを嘆くことはない。一足ごとに開かれていく情景にまかせて行くのだ。浮遊する不確定な言葉を心に抱きながら。